

嘘は許さない！ 津崎裁判ニュース

No.5
2024年12月2日
嘘は許さないプロジェクト
原告 渡邊幹夫・小林國博

舟山守夫氏(東海労関西OB)の指示で、 計画・作成された「津崎文書」!!

原告らは11月29日、第2回津崎裁判(12月11日)に向け「準備書面1」を提出した。

この「準備書面1」では、津崎被告が原告らに名誉棄損を行った最大の基である「津崎文書」が、誰の指示によって、計画・作成されたかを明らかにしている。以下、紹介する。

《「準備書面1」「第3」の「8」「9」「10」と「第4」》

8 被告は2023年11月26日の近畿地協第35回定期委員会終了後に開催した常任委員会の打合せを①「緊急常任委員会」とデッチ上げ、その場で②「渡邊発言は定期委員会を混乱させた組織破壊攻撃と確認する」ことをデッチ上げた。これが「津崎文書」である。(以下、略)

9 「津崎文書」には、「11月25日に舟山守夫氏から、津崎に電話連絡があり、11月21日に開催されたJR総連東海地協の定期委員会で、JR総連は緊急声明を撤回しろというJR総連を批判する発言があった。近畿地協でも同様のことが予想される、準備しておくように」との忠告を受けたことが明らかにされている(甲5号1頁)。この「準備しておくように」という忠告を受けた被告は「渡邊発言は委員会を混乱させた組織破壊攻撃と確認することを、全常任委員が了解した」と虚偽を記載し、デッチ上げたのである。

10 以上から、11月26日開催の近畿地協第35回定期委員会における「組織破壊攻撃」は、委員会前日の舟山守夫から「準備しておくように」との忠告によってデッチ上げることが決まっていたのであり、その後の被告やJR総連からのさまざまな対応は「津崎文書」というシナリオに沿って作られたものであることがわかる。(以下、略)

第4 小括 (前段 略)

本件によってJR総連は組織的な危機を作り出した。その根拠、出発点、端緒は「津崎文書」である。しかし、被告はそのことを全く自覚していない。誰かの、どこかの指示に忠実に従い、原告や東海労関西地本からの追及から逃げ回るばかりの結果が、ある意味本件の核心とも言える。

「津崎文書」は、東海労関西地本OB会所属の舟山守夫からの「準備しておくように」という電話一本による「忠告」に従って作成された。東海労関西地本の一OBでしかない舟山の、その影響力が大きいことが窺える。この舟山の影響力についても本件弁論の中で明らかになる。

ところで、「津崎文書」に記載されている、11月25日に舟山守夫氏が津崎被告に電話で話した、「11月21日に開催されたJR総連東海地協の定期委員会で、JR総連は緊急声明を撤回しろというJR総連を批判する発言があった。」とは、どのような事態だったのか。以下、紹介する。

《2023年11月21日 JR総連東海地協定期委員会》

◆ JR総連・山口委員長挨拶

「民主化闘争情報」には、JR東海労新幹線関西地本の仲間がつくり上げたJS労、JRサービック労働組合に関して、批判的に書かれている。「私たちの闘いにケチをつけるな！」と強く言いたい。仲間たちが一生懸命議論して、良い労働組合をつくらうと取り組んでいることに対して、「批判をするんじゃない！」と、声を強くして言いたい。

所詮JR連合は、その程度の労働組合。私たちは、「抵抗とヒューマニズム」を置いて、仲間との団結・連帯・共闘をつくり上げていく闘いを先頭になって闘う。

◆ 質疑応答での【東海労・静岡地本 高山発言】

静岡県協の高山です。(1～2点目の発言は省略) **3点目は**、JRサービック労働組合、略称JS労の結成についてです。8月18日結成、9月1日に結成集会が行われました。この組合は、関西新幹線サービックという関連会社のプロパーと出向組合員でつくった組合です。

いろいろゴタゴタした議論がありましたが、静岡地本としては、JS労と共に闘っていくことを確認してきました。東海労は、臨時大会を来月に開催して、JS労と共に歩むこと、労連結成のための規約をつくることを確認する方向です。東や貨物に労連があるように、東海でも労連がつかれることとなります。労連結成で、JR総連の組合員が拡大します。いわば、東海の地における一大勢力となります。労働組合の結成は並大抵ではできません。静岡地本としても、結成に至るまでの闘いの経過など、苦闘された組合員の実践を学び、組織拡大へと結びつけていかなければならないと考えています。

4点目は、JS労が否定的に捉えられたことがある、それに関係することについてです。JR連合が発行した「民主化闘争情報」No.1037で、「9月下旬、JR連合に『葛西明』なる差出人から『組織内組織の組合結成を認めない緊急声明』というJR総連が9月8日付で決議した声明文が届いた。」で始まる情報が出ています。内容は全くデタラメであることは言うまでもありません。文章の中には、ひがし労の分裂や貨物労組の対立も書かれています。ということは、JRグループを統括する会社の労務屋あるいは権力が情報を収集しており、JR総連解体を目的につくられた情報だと言えると思います。戦争や冤罪に反対しているのはJR総連ですから、きな臭い情勢において、もっと叩けという指令が出ていても不思議ではありません。私たちは、警戒心を今まで以上に持たなければなりません。

ところで、JR総連はJS労結成についての「9・13見解」を出しました。しかし、9月8日に「緊急声明」は出していないはずで、出していないはずの「声明」がなぜJR連合の手に渡ったのか？ 権力にとって、インターネットのメールから情報を入手することは容易ですから、メールを利用したかもしれません。ここはやはり、民主化闘争情報を見て見ぬふりをするのではなく、「声明」が流れた経緯について、例えば、「声明」をどこまで落とし、受け取った人はどうしたのかなど、JR総連として、しっかり調査して頂きたいと思えます。

「声明」は出されませんでした、「見解」は出されました。しかし、「声明」にせよ、「見解」にせよ、中身は公然とJS労結成を否定的に展開されています。そんな文書をJR総連が発出すれば、権力やJR連合に攻撃材料を与えるようなものです。私は、「9・13見解」が出されたとき、そのうちJR連合が利用した情報を出すのではと危惧していました。その、いやな予感が的中したのです。JR総連は、JR連合に攻撃材料を与えることまで想定していたのかを聞きたいです。

「見解」についての評価の発言はしませんが、組織防衛上の点からも、「見解」は撤回すべきだと思います。これは、静岡地本の総意です。

静岡地本、そしてJR東海労は、高齢化してきましたがまだまだ、JR連合・ユニオンに負けず、労働運動の炎を残すという気概で運動を進めています。ここは踏ん張りどころです。組織破壊攻撃に抗し共に闘うことを表明し発言を終わります。

◆ 上記、高山発言に答弁は無かった。そして、委員会終了後、山口委員長と高山は、以下のやり取りをした。(2分程度)

山口：「『声明』をどこまで落とししたか」というような発言をされたが、「声明」はJR総連と東海労だけしか知らない。

高山：そうですか。どこかに出したと思っていた。

山口：「見解」を撤回すべきとの発言だが、「見解」は事実と違うから撤回すべきということか？

高山：それもある。今、手元に無いので、記憶の中で話すが、淵上委員長が関西地本に要請書を持って行ったことについて、指示・指令に従わなかったような書き方になっている。

山口：要請書を持って行ったことは事実ですね。

高山：それは事実。しかし、「指示・指令に従わなかった。」となると高圧的な捉え方になる。それから、関西地本の大会での動議についての見解もおかしい。

山口：あれは、運営の仕方に問題がある。まあ～、そういうことで、撤回はできない。

以上で明らかである。

「津崎文書」は、JR総連がJS労結成に否定観を持ち、それが明白になる「9・8声明」を明らかにされ指摘されることを「JR総連への攻撃」と捉え、そのような発言を否定・封殺し、逆にそのような言動はJR総連への組織破壊行為であることにするために、JR総連と連携した舟山守夫氏が密かに津崎被告に指示し、でっち上げ、作成させた名誉棄損の文書なのだ！！